売薬行商人の町

——その経済地理学的考察——

植村元覚

第一節 はしがき

キング King[1] やリーズ Leeds[2] における集落の研究は、その立地因子として自然的基礎とともに、集落の成立発展の過程を重視し、現在の集落の性格を理解するために社会的因子に重点をおいたことは、すでに衆知の通りである。[3] イギリスの集落地理学が立地論的および歴史地理学的立場にその特徴がみられるのであるが、まさにキングやリーズはこれを推進した著名な存在であった。集落をもって主要な文化景観のひとつとし、また風土性の表現とする考え方はむしろ卓越的なのであるが、イギリスではフランスのルプレー学派の影響もあって社会経済史を重視した集落形成についての社会的基礎を重視する地域研究があることは注意される。ここではこの立場によりながら出稼としての売薬行商人の町を分析しようとするものである。

富山平野には近代的大工場地帯に近接して全国的に売薬行商にでかける「富山の薬屋さん」が約一万二千人いる。幕末には三千人余りいて、富山の町が中心であった。[4] 現在は富山市とこれを中心とする平野の田舎町の大部分とその付近の農村の出身者であり、町から出るものは専業者が多く、農村部からでるものは主として米作農家の兼業として選ばれるものでその実数は前者が三分の二であり、後者は三分の一となっているが戦後漸増の傾向をたどっている。

本稿はこのうち前者の部類として富山市の北方八キロの和合町（昭和二九年四方町と附近の村を合併してできた町）の四方について実態調査したものの報告である。四方は人口四三〇〇、世帯数九〇〇、大正時代から殆んど増加していない。売薬行商人は三六〇人で職業構成の首位をしめている。四方は幕藩時代は富山藩（十万石）の唯一の海に面した窓であり、港町として発展し、藩営の廻漕業の中心をなした御手船の根拠地であった。維新後は漁業が主であった。大正十年頃から漁獲高は減少し衰微した。さらに当時の我が国の戦後経済社会は米価高が著しく顕現し漁民は生活難にあえぐことになった。売薬業に職業構成の重心が偏位したのはこのころであり、これまでの若干の売薬業者に刺戟されて行商にでかけるものがようやく多くなっていった。このような町の機能的変化を顧みることによって売薬を中心とする田舎町の生態、そしてそれから示される富山平野の売薬業の立地とその移動を明らかにしよう。

富山平野ではその行商人分布の強度地帯[5]は富山市を中心として、半径一五キロメートルの描く円の中に分布している。都市では富山市、滑川市、新湊市、その他水橋、上市、小杉、そして四方などの町であって、その多くは海岸に近い地域と平野の殆んどすべての町や村である。しかもそれらのもつ比重は時代により可成り相違がある。江戸時代には富山平野のうちで富山の町が中核であり、経営規模も大きく専業であり、人数も全体の六〜七割をしめた。それが現在はわずかに二割強をしめるにすぎない。[6] かわりに売薬製造業の中心になっている。地域的にいちじるしい変貌をもちながら田舎町や農村に侵透している。これらの円内の農村では兼業として売薬を営むのであって、「農村売薬業」と称することができる。それは零細ながら独立の経営者であることもあるが近くの市や町の売薬業に雇われる場合も少くない。射水の低湿地帯、穴場、本江がこれの一つの著しい傾向を代表している。農村のなかでも売薬が主であって農業がむしろ従であり、飯米農家として三反位の耕作面積をもつ集落もあり、堀江部落がこの例である。

富山平野の売薬業はこのようにいくつかの地域的類型をもって理解することができる。都市や田舎町あるいは農村

についてもさまざまの個性的な姿をもち、しかもそれらは敏感に移動し変貌しつつ全体として富山平野に広く分布してきているのである。

註(1) たとえば H. King : The Geography of Settlement in South-West Lancashire, 1928.
(2) 〃 F. T. Leeds : Early Settlement in the Upper Thames Basin, 1928.
(3) 矢島仁吉、集落地理学 二二頁
(4) 拙著、行商圏と領域経済—富山売薬業史の研究 八一頁
(5) P. H. Schmidt : Einführung in die allgemeine Geographie der Wirtschaft. 1932. S. 5.
(6) 拙稿、富山売薬（富山大学北陸経済研究所月報第一号）
(7) 拙稿、売薬型農村（富山県の地理学的研究 第二集）

第二節 四方町の風土

富山平野の中央部に位置する富山市は交通の要めの点をなしていて、東西に北陸線が通り、南方に高山線、北方に富山港線がその起点をなしている。これら国鉄のほかに、私鉄として東方に宇奈月、魚津、滑川、上市を結びまた立山登山に通ずる富山地方鉄道本線とその支線である立山線、南方に走る笹津線、西に海岸線として高岡に通ずる射水線などの支線やまたそれを補うバス路線がいずれも富山市から放射型にでている。この平野は北陸に卓越する米の単一栽培地帯であり、汽車、電車、バスの窓からは、見わたす限りの水田が続いている。

富山市の西部は神通川が北に流れていて、これは中心街から北方七～八キロメートルで富山湾に至るのであるが、その東側は富山市北部工業地域であって、近代的重化学工場が数多く立地している。汽車、郊外電車、またバスは富

山から岩瀬行のほか岩瀬経由滑川、岩瀬経由東富山、新庄経由滑川行、豊田行など路線もその交通量が甚だしく大きくて便利である。さらに富山地方鉄道では海岸線を計画していて、富山から富山港線に平行して水橋、滑川に至り、地鉄本線に接続するものである。

このように東側が工業地帯であり交通密度が高く活動的であるのに対比して、神通川の西側は全く村落的景観が展開していて工場はほとんどみられず、富山から四方を結ぶ県道と、小型の電車軌道の射水線が僅かに利用しうる交通路をなしている。尤もこのほかに四方駅から堀岡と石坂の村に行く旧型のバスや富山から岩瀬近くを通って四方に至るバス交通は日に数回ほど通っているだけであり乗客も少い。西側の主要な交通手段であるこの射水線は、それも海岸線から新湊を経てコの字型に迂回し、高岡に延びている。この射水線が富山市の中心商店街から神通川をこえて北に向って約三十分海岸に接するところに四方の町がある。（射水線はもともと越中鉄道として四方町の地元資本によって建設された。大正末期四方から富山の北口駅までであった。人口四千五百人のこの町とその沿線の農村の人口のみでは利用者は少く経営的には困難であったが、その後、海岸線をつくり、新湊市（人口三万）に延び伏木・高岡の工業地帯に接続することになり、戦時中富山地方鉄道に合併された）。

四方町は前記のように南の倉垣村、八幡村と合併して和合町を形成した。和合町は西は射水低湿地域に属し、南は富山平野を呉東と呉西に二分する呉羽丘陵に接していて、百塚、追分などの部落は第四紀洪積層の埴土がみられ、畑地となっているが、それを除いて多くは、そして北端の四方町では神通川によって構成された第四紀新層に属する河成冲積層であり、低平で水田耕作に適した土地である。昭和三十年度農業基本調査によると和合町の耕地面積は八三一町歩のうち水田面積は八一七町歩であり、水田化率は九八・三％の高さをしめ、富山県全体のそれが九二・五％をしめて全国第一位をしめているのに対し、この地域はこのような水田化率の高さは一層顕著にあらわれている。そし

て今後新たに開拓する余地がないくらいに耕作されている。西の打出浜では著しい海岸侵蝕がみられ、その沿岸から数キロの海底に埋没林が発見されている。四方町は北に突出した砂洲の上に形成されている。四方町の周囲は標高一・五メートルのコンターがみられるように低平な水田地帯がつづいているなかに、襞状に湿田地帯を形成していて、かつての神通川下流の名残をとどめている。

四方駅は町の中央南部に位置している。駅前には売薬の商品名を数多く記した広告板が大きくたてられてあり、町の産業の内容を象徴している。そして駅前の近くには小規模ながら女工数十人を使用する製薬会社と、かまぼこ製造工場とがあって、訪ねるひとびとに町の印象を刻みつけている。町は神通川の堆積作用によって形成された砂洲の上にできているため、町に砂地が多く、雨が降ってもぬかるみがない。町は東西二キロメートル、南北一キロメートル弱の東西に長い隋円形に似た形をしている。東の方の海岸は砂浜になっており八重津浜と称して夏は海水浴場が開かれ、数軒の浜小屋が建てられていて、町や富山からの客を迎えるささやかな観光地でもある。わりに遠浅のこの海水浴場は西岩瀬の村社諏訪社の緑の森を背景にして遠くに北の能登半島をのぞみ、東には三〇〇〇米の北アルプス連峯、西には歌に名高い二上山を、そして近くには東岩瀬の近代工場と四方の漁港をひかえている。

四方は江戸時代は北陸浜街道が東西に貫通し、港とともに交通上重要な位置をしめた。度々火災にみまわれたが、道路は狭く昭和になつても戦争中の大火災の以前には「道路狭きをもって自動車を通ずる能わず、概して交通不便なり」[1]と称せられていた。火災後は都市計画によって町の中央部は一一メートルの広い通りが真すぐにのびていて直角に交叉し、南北のどの通りからも富山湾の海の眺望がほしいまゝであり、晴天の日には湾の向い岸の真正面に能登半島の美しいゆるやかなスロープをもった、恰もウイスビヤスの火山に似た形の丘陵が紫色に浮かんでいる。昭和二〇年四月——富山平野に頻発する春のフエーン現象の卓越する時であるが——に火を発して、町の六割の面積、しかも

中央部を焼失し、徹底した都市計画を道路において進めた。小さな町でありながら碁盤型の整然とした都市計画が思いきってなされていて、他の町にはみられないほどである。建物のなかにやはり木造であるが二階建洋式の一寸町役場風の建物が数軒みられるが、これは製薬工場であり、この町に異様な建築物である。そのほかは住宅が多い。とくに壮大な屋敷は見当らない。ときに瓦葺きで、茶褐色の漆をぬった丈夫な旧式の二階建が目立つが、それらはきまって売薬業者の家である。都市計画地域を除けば——もえなかった東部の西岩瀬地区では——道路は急に狭くなり、また対岸東岩瀬に至る旧街道以外は曲りくねっており、家屋も旧式で、屋根はなお板屋根で石がのせてあり、古めかしい京風の家並であって、玄関の造り、街路に面しての格子やさまど、突縁があり、入口を入って奥深い通り庭の路、おもての間、おえ、なんど、それに仏間、奥座敷というような家の間取りの造りかたである。都市計画地の中央部の現代化した都会風の建物の地域とは明らかに対照的である。しかし双方に共通するのは店舗が少いことであり——もしあっても住宅を二三坪改造したような小規模なものがときどきみられる——住宅の町であること、そしてどちらの地区にも異様なくらいに人通りが少く、ときに新湊方面からこの町を通りぬけて富山市に行く自動車が砂けむりをたてて通るのを除いては乗用車もトラックもまれにしか見られない。警笛や騒音は少いが、町名や売薬の名の看板また「名物たら汁、たらの浜やき」などとつけた街灯が林立していて、焼失しなかった旧地域にも延びている。少し遠方からも解り易くして白地にはでに記入されてある。夜はこの電灯で町には暗陰はない。パチンコ屋、カフェー、それに漁港につきものの射的屋はこの町には見当らず、[1] 僅かに焼失を免がれた西の端の地区に料理屋が数軒と、最近できた小さい映画舘と肉屋が一軒づつある。服装は洋服にしろ、和服にしろとゝのった人が多い。町の中を行けば海からふいてくる塩っぱい健康的な香りにまじって魚の生臭いにおい、そして町角には薬の芳香——鼻をつく振り出しの薬のかぐわしい香がにおっている町であることがここを訪れるものには著しく印象ずけられる。

第三節 四方の人口および職業構成

この町の人口は戦前、戦後を通じてともにその増加率は甚だしく低く、過去三五年間を通じて僅かに一割余りの増加を示すにすぎない。富山県全体の人口が四割を示しているのに比較すればその著しい停滞性が気づかれる。わずかに昭和一五年から二二年にかけては四〇五五人から四六〇一人すなわち一三・五パーセントの増加したのが唯一の注目される場合である。その他はいずれも殆んど増加の傾向すら認められないくらいのものであり、増減の差が極めて小さい。これを隣村の八幡、倉垣の二村と比較してみるならばこの傾向がとくに著しいものであることが判明する。この両村は四方町の南に連続する農村であって、四方はこの両村の商業的中心地をなし、この三つの町村が昭和二九年に合併して和合町となってから町役場は新しい町の自然的中心地八幡に位置している。八幡村はこの全期間を通じて大正九年三六七一人から昭和三〇年の五七三三人に、そして倉垣が一三四六人から二〇三五人と増加して、それぞれ一五六・二及び一五一・二パーセントになった。両村も大正九年から昭和一〇年頃迄は農村不況にあえぎ、人口はむしろ減退的傾向すら含むものであったが、この期間は四方町は富山県と同一歩調を辿ってい

和合町総人口の推移

	四方町	指数	旧八幡村	指数	旧倉垣村	指数	富山県（1000単位）	指数
大正 9年	3,853	100	3,671	100	1,346	100	724	100
〃 14年	3,946	102	3,607	98	1,353	100	749	103
昭和 5年	4,183	109	3,609	98	1,340	100	778	108
〃 10年	3,974	103	3,594	98	1,325	98	798	110
〃 15年	4,055	105	3,681	100	1,348	100	822	114
〃 22年	4,501	119	6,122	167	1,978	147	979	135
〃 25年	4,880	127	5,969	163	1,925	143	1,008	139
〃 30年	4,322	112	5,733	156	2,035	151	1,021	141

各年次の富山県統計書による。

た。しかし昭和十年ごろから軍需経済が活潑化し、対岸の富山市北部工業地帯の形成が進むようになると八幡村にも影響が現われ、ことに昭和十七年より工業地帯の東岩瀬に工場をもつ日本海重工業会社の社宅群がこの村内の草島地内に建設せられ、終戦後はこれに代って北陸電波監理局監視部官舎が設置されたことなどの特殊事情によって人口が増加し、更にこの地方の一般的傾向として戦災および疎開者の定住などによっても大きく伸びた。こうしてそれ〴〵六六・三パーセントと、四七・六パーセントの増加となった。しかし四方では前記の大火によって罹災者の転出及びこれに原因する戦災者の収容力の低さがその増加を他より低めたことも四方町の人口総数に影響したものであったといえる。前の表では四方町の人口総数は二五年から三〇年にかけて五六〇人即ち一一・四パーセントが減少した。しかもこの間にこの町に火災・水害・台風などの大事件は起っていない。この町は日本中いたるところに見えだされる田舎の町とみられるが、このような人口統計をみるならば、そのなかに問題にされるべき諸点があることに気づくのである。

思うに一定の地域は生活する人間の数である人口は、その地域の一切の人文的、社会的現象の相当者の集団として従って一定社会の生活事情を凝集して反映するものである。人口現象は一定地域・一定時代の社会の所産であり、その人文的社会的諸関係を最も明らかに表現する指標である。四方の土地とその上に生活する人間集団とのつり合のありかたが示される。かくてこの町の人口統計をみるならばこの地域の生活事情が数量的に考察される一つの基本的根拠を与えてくれるものであると解せられる。

つぎに、和合町についてそのなかの旧各町村別の職業構成をみよう。農業の比率が高い地域は農村地区である八幡倉垣であって、産業人口の六〇パーセント内外をしめている。製造業では八幡、四方が多い。これは八幡は神通川の向い岸の東岸瀬の工場への勤務者がおり、四方は製薬工場の勤務者があることが特色づけられるほかは、ともに富山

市への工場勤務者によって示されたものである。卸小売業ではまた四方のみが圧倒的な比重をおさめている。これは四方が第一次産業が一一・四二パーセントにすぎないのに対応して第三次産業の比率が他に比較して高率な町であること、しかもこの卸小売のなかには売薬行商人が含まれていることに由来するものである。

なおこの就業人口を富山県全体の就業人口と比較すれば次の通りである。

和合町全体を富山県平均に位置ずけてその職業構成の内容をみるならば、まず和合町では第一次産業のしめる率は比較的に低く、この割合だけ第三次産業のそれが高いこと、そして第二次産業のそれは県平均と一致していることが知られる。かくて県内のなかでも第三次産業[2]の職業が比較的多くをしめていることは産業構成のあり方、したがってまたこの町の経済的進歩の条件を示しているように見うけられる。これらのうち細目については農業が著しく低く富山県の五〇・三パーセント

和合町（旧町村別）産業人口構成

（昭和25年国勢調査による）

産業別	四方		八幡		倉垣		計（和合町）	
	実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比
第一次産業	200	11.42	1,581	57.85	563	64.12	2,344	43.71
農業	76	4.34	1,579	57.78	543	61.85	2,198	40.98
林業	—	—	—	—	—	—	—	—
水産業	124	7.08	2	0.07	20	2.28	146	2.72
第二次産業	430	24.54	628	22.98	104	11.85	1,162	21.67
鉱業	3	0.17	1	—	1	0.11	5	0.09
建設業	99	5.65	92	3.37	45	5.13	236	4.40
製造業	328	18.72	535	19.58	58	6.61	921	17.17
第三次産業	1,122	64.04	524	19.16	211	24.03	1,857	34.63
卸小売業	809	46.18	191	6.99	99	11.28	1,099	20.49
金融保険業	22	1.26	24	0.88	10	1.14	56	1.04
運輸通信業	93	5.31	83	3.04	36	4.10	212	3.95
サービス業	143	8.16	149	5.45	38	4.33	330	6.15
公務その他	55	3.13	77	2.81	28	3.19	160	2.99
百分比計		100.0		100.0		100.0		100.0
就業人口総数	1,752		2,733		878		5,363	

富山県産業別就業人口表

（昭和25年国勢調査による　単位　1000人）

就業人口総数	473	100%
第一次産業	249	52.8
農業	237	50.3
林業	4	0.8
水産業	8	1.7
第二次産業	103	21.7
鉱業	1	0.2
建設業	23	4.8
製造業	79	16.7
第三次産業	121	25.4
卸小売業	49	10.4
金融保険業	4	0.8
運輸通信公益事業	20	4.3
サービス業	34	7.1
公務その他	13	2.8

が和合町では一〇パーセントも低く四〇・九八にすぎない。これに対応して第三次産業のうち卸小売業が富山県が一〇・四パーセントであるのに対し和合町のそれは二〇・四九パーセントと高率をしめている。和合町が県平均よりやゝ高いのは水産業、製造業でありサービス業は比較的振わないものとなっている。第三次産業のうちで卸小売業が県平均より著しく高率をしめることが注目される。それ以外の金融保険や公務のそれは同等であり、運輸通信公益事業やサービス業のそれらは稍々低いのであり、卸小売業を除いてはむしろ逆の傾向が指向されていることを知るのである。また山林がないので林業は皆無であるのは当然のことである。

次にこのような傾向を更に四方町のそれについてみよう。

第一次産業の従事者は二〇〇人で、四方町全就業者数の一一パーセントであり、しかもそのうち水産業従事者は一二四人、農業従事者は七六人であって前者の数が後者の二倍近い数をしめている。海浜に漁港をもつ四方町として重要な産業であり、漁港の附近に居住して漁師町を形成している。たゞし他の漁師町にみられる様に狭い路やこみ入った家々が建てられているのではなくて、大部分は焼失区域のなかにあるので広い道路によって区劃整理されている。

第二次産業は四三〇人を数え、第一次産業従事者の二倍以上に達している。これは富山県平均二一・七パーセントまた和合町のそれの二一・六七パーセントよりやゝ多く、四方町全就業者数の二五%をしめている。わけても製造業

者は三二八人をしめて四方町の産業別就業者中で、卸小売業の八〇九人に次いで第二位に達し、他の職業より遙かに懸け離れて多数をしめている。これは隣接の富山市、新湊、高岡市などの近代的大工場に通勤する工員や富山市にある広貫堂、丸三製薬など製薬会社その他の製造業の事業場に勤務するものであって射水線の電車を利用して通勤するのである。

第三次産業は一、一二二人であって就業人口総数一、七五二人の六四・〇四パーセントを占める。これは八幡、倉垣の農村地区ではそれ〴〵一九・一七パーセント、二四・〇三パーセントの低さをしめていてこの両村が農業のそれにおいて五七・七八パーセント、六一・八五パーセントの高率をしめているのと丁度反対をなして四方町では第三次産業が高まっている。しかもこれは富山県の平均が三四・六三パーセントであるのに顧れば、まさにその二倍に近い高率に達するわけである。この高さによって和合町の第三次産業が三四・六三パーセントの高率となり、富山県のそれより一〇パーセントも高くなる結果をなしている。しかもこのなかで卸小売業の部門の従業者が八〇九人で四方町全体のそれの約半数近くをしめていてここの第一の職業構成をなしている。その高さは富山県平均のそれが一〇・四パーセントをしめるのに対して四・五倍の顕著な高さを数えるのである。この異常にまで高まっている卸小売業の実態とその内容がこの町の職業構成からみた第一の特色である。卸小売業のなかには定住の店舗商人とともに我々がここで問題にする売薬行商人が加えられていることが注意されなければならない。

これに附随して第三次産業内部ではこれに加えて金融保険業、運輸通信公益事業、サービス業、公務員などサラリーマン的性格の就業人口も少くなく、一七・八六パーセントを占めている。これは農村地区の八幡、倉垣のそれがそれぞれ一二パーセントと一一パーセントをしめているのに対し、町部としての性格を帯びている。

註(1)　四方町沿革誌　二七二頁

(2) コーリン・クラーク「経済的進歩の諸条件」における内容は具体的には反省されねばならぬ。

第四節　町の機能的変化 —— 賣薬の町の成立前史

四方町の売薬は明治初期までは町の主要な産業ではなかった。明治十七年の富山県婦負郡役所編輯、「富山県婦負郡治一覧」によれば婦負郡で売薬行商人は一五九名を数え、そのうち四方町戸長役場所管では、六七名にすぎなかった。次の表はこれを整理したものであるが、四方近辺の練合村、八幡村はそれぞれ七人、五人を数えたのみであった。とはいえ富山藤井町をのぞいては婦負郡北部には行商人が四方を中心にして分布していたことがしられる。同書の十七年度における婦負郡の輸出額の総計が三三万三千円余であり、このうち生糸が第一位で十一万三千八百円、蚕種五万二千円、繭二万五千円や米三万七千円などにくらべて売薬の輸出はわずかに、二一二箇で五三〇円が記載されている。[1] この統計では売薬商人六十七人について余りにも小額であるが、生糸、蚕種、繭、米などに比較しては、はなはだしく小額であった。

ところで江戸時代に四方に分布したことは、すでにはやく富山藩倹約奉行から元文五年領内の富山、八尾とともに西岩瀬、四方の反魂丹売買のものについて調理がなされ、名書、印形がとられたこと[2]から知られ、四方町沿革誌にも幕末に積出された「主な産物は売薬と米穀であり、……輸入品として主要なるものは塩、唐津、砂糖、薬種、唐物、油、繰綿、たばこ」[3]等であり、この薬種は売薬の原料であって大阪から送られたようである。このことからして四方および近辺に売薬業の存立していたことは推察される。しかし町の代表的な産業ではなかった。むしろ港町であり、漁業の町であった。ここでは売薬業の成立以前の四方町についてその機能的変化の過程を摘出してみよう。

集落は、わけても村落でなく町や都市では、各種の産業に従事する人口や業種の多少によって各種の機能が重複す

明治17年富山県婦負郡における売薬業

戸長役場管内	人口	売薬営業		同請売		同行商	
		方数	人員	方数	人員	方数	人員
四方町	4,386	11	8	376	16	888	67
練合村	552	0	0	34	2	105	7
八幡村	3,617	2	2	16	2	127	5
追分茶屋村	4,165	1	1	75	1	75	1
田刈屋村	4,187	19	1	102	3	175	6
富山藤井町	4,429	66	14	797	34	805	67
金屋村	3,745	1	1	38	2	39	2
西押川村	2,810	1	1	0	0	0	0
長沢村	3,978	0	0	0	0	0	0
高日附村	2,731	2	1	0	0	0	0
中名村	5,053	0	29	59	4	44	3
黒田村	3,348	0	0	6	2	0	0
下高善寺村	2,753	0	0	0	0	0	0
湯村	3,306	0	0	0	0	0	0
三ツ松村	5,367	0	0	0	0	0	0
八十島村	3,506	1	1	1	1	0	0
八尾東町	6,113	21	4	164	19	2	1
掛畑村	4,818	0	0	0	0	0	0
楡原村	2,919	0	0	0	0	0	0
計	71,133	125	63	1,668	86	2,260	159

る。ネルスン（Nelson）は都市の活動力とくにその経済活動を把握する方法として、職業構成のなかの労仂力を指標として集落機能を明らかにしようとする。[4] 江戸時代のように統計資料の不備な場合にはこれにあたるような中心的産業に基本的性格を求めて、彼の方法論に接近しそして町の機能的および地域的性格を明らかにしなければならない。

(イ) 港町

城下町は直接海港をもつことが、理想であったが、これが不可能な場合には外港をもった。[5] あたかも加賀藩では金沢について宮腰（金石）が果したと同じ機能は富山藩では四方がはたした。江戸時代において四方町は富山藩の港として、物資の海上輸送をなし、藩の唯一の海への窓をなしていた。藩の領主的商品経済の

一環としての蔵米の輸送のほかは、微々たるものであり、西廻海運によって栄えた港町である酒田、新潟、福浦、湯泉津、下関などとは比較にならない地方的な港でしかなかった。そして「領内唯一の津港として他の各村に比し一種特異の発達をとげた。四方は主として漁業に当り、西岩瀬は津港として目せられ」[6]米と塩などの蔵がおかれた。幕末にはこの両町は御手船の根拠地として枢要な地となった。

大正中頃に書かれた四方沿革誌には「天正八年神通川洪水のため河流に変化を来たし、現今古川と称するは当時の本流なり」[7]。またその河口に彦助潟が横たわり、かって八重津の港であったが、流域変遷により潟をなしたものである。（四方町沿革誌 四一三頁） 現在の古川は西岩瀬の東に二〇米～三〇米の河巾をもつにすぎないが、その名称に当時の面影をとどめているだけである。萬治元年神通川の洪水があり、「下流東に転ず。これ古川より今の流域に変ぜし」[8]時であって、そして海岸より一キロメートル入ったところに現在も十世帯位ある古川部落が残存している。そのすぐ上流に位置する部落を地図で求めるならば、金山新、天保島などの部落があるが、これらはいずれも古川と現在の神通川の中間の低湿な水田の中に僅かに小高い微地形を利用してその上に恰も浮んでいるようにみえる集落であって、これらの集落の名称からしてその新しさを理解することができるのであり、神通川の変遷によって成立した近世の開拓村である。この河身の変遷によって西岩瀬の港が衰退傾向を示すようになり、四方の港がむしろ藩の主なる港となった。

寛永十六年加賀藩の前田氏が富山に支藩を置き、婦負郡一円がこの治下に入ることになり、西岩瀬がその海港となった。なおここより数キロ東方に位置する河口の東岩瀬は加賀領であるが、加賀藩はここの代官一人郡付足軽五人御蔵番足軽五人を置いて宿駅にした。このようにして、河口をはさんで直接にでなくその間に数キロの間隔をおいて西岩瀬と東岩瀬の港町が成立した。これは恰もハーツホーンが、ミシシッピ川に沿つて近接するミネアポリス Minne-

apolis とセント・ポール St. Paul は双子都市として発生したものであり、これは交通関係によったものであるとするのとその発生基盤が類似している。[9] もっともここでは内陸河川でありミシシッピ川の航路の終点あるいは横断地点として互に発展したのであった。西岩瀬は富山藩の三宿（西岩瀬、八尾、四方）の上列におかれ米・塩・唐津・陶器などの輸出入の品の倉庫があった。

北陸地方における交通従って物資の輸送の中枢は北陸街道であった。近畿から東北、蝦夷に至る最も近い道路に当り、奈良時代に越中の国府が高岡市伏木古国府にあったことは大和朝廷の中央集権の実をあげる立場からみれば北の方に対する一の政治的経済的拠点を果すべき地理的位置にあったと解せられる。荘園が越中に急増すると貢納のためにも各荘園と北陸道が結ばれ、中世には立山の信仰が発達するとその山麓の本宮、芦峅、岩峅などに堂舎仏閣が建ちならび、全国からの修験者や道者或いは武士の立山禅定が盛んとなった。[10] 近世においては越中は加賀藩およびその支藩である富山藩の支配下にあったので支配関係は他の領国のそれにくらべて単純であり、加賀、越中、能登との交通も円滑に行われた。北陸街道[11]は金沢から倶利伽羅峠を経て今石動、福岡、高岡（江戸時代には越中の最大産業都市として栄えた）大門、小杉そして海辺に向い、西岩瀬を通り、草島から神通川を渉って東岩瀬、滑川を通っていた。加賀藩ではこれを往還と称して江戸参勤の道としていた。このようにして富山を離れて北の海辺を走っていたのは距離的に直線コースであることのほかに、富山藩領を通ることをなるべく避けようとの意図によるものと思われる。[12]

寛文年間に富山藩では草島村古川を開鑿して西岩瀬に運河を通じた。[13] 能登塩をこの地に引いて富山に運ぶためのものであった。[14] 当時の西岩瀬は現在より半里余りも海中に突出していて内に潟を抱き、水路で西は海に通じ、東は古川に通じていた。西岩瀬の西に続く四方村は漁港であり、元文四年に宿駅となった。尤も中世においては北陸の本街道は浜街道にあつたことがあり、四方の西隣の打出や、四方、西岩瀬の各部落は交通の本道路に面したこともあった。

なお四方町の沿革誌によれば[15]この地方の地形が海岸侵蝕をうけて著しい変化をなしたことを「西岩瀬海禅寺跡も今に海中に存せり、或いは海中数十町の処より松柏の大木を切り上げ……貞享年中の古図を見るもなお二つの潟を存せり。もってその変遷の甚しきを知るべし（現在の四方町は四方西岩瀬南に上り窪村並列して町を成せども同図によれば過半海となり、和合の崎は今は遠く網場となりて名称を存するのみ）」とあり、また元文四年の絵図を現在の町並と対照すればその片町、北中町、西橋川端町以北はことごとく海中となれり[16]」とある。

富山藩では寛文の頃米一万二千石を四方の港から大阪に回送した[17]。この頃から北海道、下関、秋田等漸次船舶交通の便が開かれた[18]。

元文年間四方村は宿駅[19]になり、よって十村支配は除かれて町肝煎がおかれ奉行所の采配をうけることになった。寛保三年四方、西岩瀬両浦に船見御番所が設けられ、地他国共出入の船及びその荷物漁船を取締り、往来切手、宗門改を行うことになった。ことに「塩、菜種、諸油、繰棉、たばこ其外何によらず積入候船々番所之前へよせ次御領境などにおいて密々船積揚仕もの有之候はゞ其荷物押へ置即刻及改事。附右品々荷物陸より洩荷通路有之所々是又昼夜心懸相廻及詮議べし[20]」とされた。西岩瀬と四方の関係については、文化二年七月の「西岩瀬町縮方条」として「町中末々のもの下人等に至るまで守るべき」諸項目のなかに、

御廻米川下西東岩瀬和合えあい廻し候の節もし風波高く人足等入用に候はゞ、四方えも申しつかわし、早速人足など呼び集めあい仂かさせ申すべく候。別して大切なる御用候の条常々厳しく申し渡しおくべきこと[21]

とあり、西岩瀬の津港の積込、荷揚の労仂力は四方からも要請せられるべきこととした。漁師町の四方は労仂力供給地域をなしていた。とはいえ四方町も港町的性格を欠如するものではなく同様に米の輸送も行ったのであるが、西岩瀬のこの性格の顕著なことは四方町側からの資料によっても知ることができる。即ち文久三年のものであるが四方

町縮方条数書写の項目のなかに、

御廻米川下り四方和合え、あい廻り候節もし風波高に人足等入用に候はゞ所の儀はなおさら西岩瀬より申しこし候とも早速人足さし出し役人共召連れ罷りこし相仂らかせ申すべく候。別して大切なる御用候条常々厳重申しわたしおく可き事[22]

とあり、地元からの人足の需要は勿論西岩瀬からの要請あり次第供給すべきことが規定せられ、前項の内容を一層明瞭にしながら四方町と西岩瀬の町の機能をしることができる。西岩瀬と四方の町縮方の項目は殆んど同一であり、相異点もない位であるのに拘らずこの上述の点のみが相違していることからも、裏書されるわけである。

註　文化二年西岩瀬町縮方条（四方町沿革誌六七～七七頁）及び文久三年四方町縮方条（同書九六～一〇六頁）による要項を整理してかかげると次の通りである。

1、公義の厳守。
2、親孝行。
3、御鷹野、引網の際の掃除。
4、町の防火、夜番廻（組頭肝煎は数度相廻、町年寄も相廻ること。）
5、出火の際、御高札、御蔵所への出動手配。
6、博奕停止、宿もと、組合のものも処罰。
7、船の製造には届出。
8、御収納銀米並諸役銀などは肝煎に取立。
9、切出し高、家屋敷、舟網場などの売買質入の際は組頭へ相達すること。

売薬行商人の町　（植村）

10、御廻米、西岩瀬・和合にきたとき人足を四方に要請する。（西岩瀬縮方）
御廻米、四方・和合のときは地元から、また西岩瀬から要請せられた場合はこれに応ずること。（四方町縮方）

11、御廻船、並商舟の来たとき、難船のときは町役人出動、また荷物、舟粕、舟貝を取揚げた者は町役人に届出、賃の儀は浦方格合の道第一をもって請取るべきこと。なお海上の拾いものは肝煎に届出、百日以後所有者が現われない場合は、拾い人に渡すべきこと。

12、飛州檜木御用材木も右に同じ。

13、船積には浜役人が改むべきこと。

14、諸魚斗桶には肝煎は寸尺を相改め焼印をすること。焼印なきものは処罰。

15、漁場に出入の者は組頭、肝煎が詮議をする。

16、商売、貸金には暴利仕間敷きこと、質屋の外は質物取扱い禁止。

17、他領国商売に行く者は町肝煎に届出ること。また帰着日限も届出ること。

18、旅人の宿泊には肝煎に届出ること。

19、旅人が病気になり人を望むときは村方より渡すこと。死亡したときは早速案内すること。

20、他所より来住して家屋敷或いは借宅を望む者は町頭より町肝煎に届出ること。慥なる者と分れば居住さすこと。また奉行人請縮も入念に行うこと。

21、衣類、諸道具の出所不明のものは買わざること。

22、盗難品は少々にても奉行所へ届出ること。

23、行先不明の者は宿泊せしめないこと。頼めば町頭え申しでること。

24、町中道掃除毎日行うこと。附り嫁娶の節礫など打たないこと。

25、不審なものの寄集には案内すること。滞るときはその町内組合頭などの越度となること。
26、貸屋は富山と同一ではないが町口九尺より狭き貸家、並びに裏屋を囲い貸家に致さないこと。
27、禁制品が町にあるときは組頭をもって肝煎に届けること。
28、欠藩人の処置。
29、他領商人の処置。
30、口論の処置。
31、他領商人の商品は売払後速かに支払うこと。
32、縮等申付けの者はその組合の者に番をなさしめること。
33、家作については町並びとすることの注意。
34、遺跡の保存。
35、御用を命ぜられれば遅滞なく肝煎に出頭すべきこと。
36、奉行所の伺いの態度。
37、諸役人を粗末にせぬこと。
38、町の風除樹木御帳付は免許のこと。
39、町年寄、肝煎、諸役は伝馬免許のことなど規定した。

西岩瀬、四方両町縮条の諸項目は一致してなかに、第一〇項目のみが異っていることはとくに注目される。なおこれに対応して西岩瀬の町の性格を示す表現は同じ四方町縮方条数書写[23]項目のなかにうかがわれる。

西岩瀬の儀は御蔵所などこれあり候条、もし出火候はゞ見つけしだい町年寄肝煎等は人足召しつれ早速馳せつけ火防申すべく候。其町中の者共えも申しつけおき右出火見つけ候もの早速年寄肝煎方え案内におよび候様急度申し

付置くべき事

として、四方町とともに西岩瀬のとくに御蔵の防火を町縮方の項目としたのであり、両集落の協調的相互依存的関係の一端をうかがいとることができる。なお、領域的規制[24]の強化されていった幕末段階では、文化二年の「西岩瀬町縮方条」に、「他国え何によらず商売罷りこし候はゞ町肝煎え相断り請人相立て御関所過書申請罷り立つ可く候。尤も罷帰り候日限請合なしおき申すべきこと」[25]とされ、領域内から外に商売に出る際には町肝煎に届出て請人をたてるべきこととされた。

幕末から明治初期には海上の交通は「渡海船は三二隻、能登富山藩との間は二六隻をもって交通の開けあり」[26]という状態で、港町の機能の一端を推測することができる。明治三年十二月当時の船役の決算取立帳によれば[27]

	四方町	西岩瀬町
渡海船	二四艘	八艘
能登便	一九艘	七艘
	計五八艘	

漁船　筒船一〇艘　釣船四五艘であった。

しかし廃藩置県後は藩経済の窓口としての本町の商業的機能は消滅することになり、却って東岩瀬にその勢力は奪われていった。たゞその企業家は新時代に応じて汽船の使用を初めて企画し、明治一〇年西岩瀬の嵯峨孫三郎は蒸気船をもって直江津、伏木間の航路を開いたが、これは北陸地方の汽船航路の最初とされた。しかし陸地鉄道便が開通されるにつれて、次第に交通路から脱落し、わずかに北海道や樺太、沿海州への遠洋漁業その他の帆船が寄港するに

とどまった。[28]

註(1) (明治十七年)「富山県婦負郡治一覧」

(2) 富山売薬業史史料集　五七頁

(3) 拙著、行商圏と領域経済——富山売薬業史の研究　九五頁、および四方町沿革誌　八六頁

(4) Nelson. H. J : A Service Classiffication of American Cities Econic geography. 1955. No.3

(5) 歴史地理(朝倉書店　新地理学講座)　二五〇頁

(6) 越中婦負郡志　一一四頁

(7) 四方町沿革誌　五頁

(8) 同書　三九頁

(9) Hartshorne : The twin city district (Geogr. Rev. 1932)

(10) 木倉豊信、古代、中世の越中と交通(越中史壇　昭和三一年三月号)

(11) 拙稿、北陸街道(日本地名辞典　朝倉書店刊)

(12) 坂井誠一、越中における近世の交通概観(越中史壇　第一〇号)

(13) 四方町沿革誌　六頁

(14) 前田家乗、および四方町沿革誌　四〇頁

(15) 同　一〇〜一一頁

(16) 同書　五三頁

(17) 前田家乗、および四方町沿革誌　四〇頁、拙著、前掲書　九四頁

(18) 四方町沿革誌　二七三頁

売薬行商人の町　(植村)

(19) 四方町沿革誌　五二頁
(20) 〃　五六頁
(21) 〃　六九頁
(22) 〃　九八頁
(23) 〃　九六頁
(24) 拙稿「幕末領域経済における封鎖性と開放性」（富大紀要 経済学部論集第十二号）、および拙著、前掲書　二九七頁
(25) 四方町沿革誌　七一頁
(26) 〃　二七四頁
(27) 〃　〃
(28) 〃　二七六頁

(ロ) 漁　業

四方神社の由緒書によって四方町の由来をみると「四方町は天正の頃におこり一小漁村にして民戸百に満たず。……天文の頃戸数三百余に至り……」[1]とあり、幕末には漁業戸数四百戸に達していた。この漁業は配縄、竿釣、漬場、手繰網、台網、地曳網等によるものであった。漁の売買については桶に肝煎の焼印をうけて営業用とされ、この焼印をうける際に運上金が課せられたようである。文化年間の「西岩瀬町縮方条」[2]に

諸魚斗桶先規の通り肝煎方にて寸尺あい改め焼印記漁師商人共え相渡売買申し付くべく候。もし焼印これなき桶にて売買仕る者これあるにおいては急度縮申し付くべく候。かつ台網手舟を出し漁にて魚売買せしめ候儀堅停止申し付け候事。

附り鰤、網之儀鰤取り候節拾歩一銀差し上げさせ申すべく候定御役銀これなきものに付先規より右御格に候条此の旨申し渡しおくべく候」

漁業地である四方では漁民はその漁獲物を城下町である富山の街に日々歩いて行商したのであった。それは次の願書にあるように漁家の二三書は従来、在方せり売りその他富山に売りに出ていたが、魚問屋においては暗黙のうちに見逃がされていた。ところが寛政年間数年不漁が続いた折、藩に於て「其行商を禁じ其獲る所の魚類を悉く富山市場に致さしむ」[3]ることとなった。「元来四方町は漁業を以て生活するもの四百戸に上り漁民の窮迫は町の廃亡に帰すべき憂患」[4]であるので同町に於て総代から其の禁の解除方を御郡奉行に嘆願した。四方の漁夫の生活を示す資料であると考えられるのでこれをかかげれば、次の通りである。

乍恐口上書を以て御願申上候[5]

当春魚問屋御締り方御定法厳重に仰せつけさせられその意を得たてまつり宿方一統に申しふれおき候えども、鰯、鰺、鯖、烏賊等雑魚の類は先前より御城下売御免と申す儀は御座なく候えども、右至って雑魚之儀に候故軽き海士共の二三男など口過ぎのため百塚口の番に於て通り口役を相いたて、在方せり売り仕り余り候分は致し方御座なく候につき御番所端々末々の者へ売り来りなおまた魚問屋にても右軽き者ともに候間先前より不憫を加えられ見遁し同様に成り来り申し候……。

此の間鰺子等御当所へ売りに罷りこし候ところ魚問屋廻りの者これをおさえ吟味をとげ、その上このたび右鰺子売当番御目附衆中より手鎖御締り仰付られ御引渡に成られ、御尤もには存じ奉り候えども、かよう御座候とは極難の商人並びに漁士共取揚げ少々の田作鰯など一同売捌き仕りがたく且また当年鰺子たりとも至って不漁に御座候……去秋以来前代未曽有の不漁に御座候て御救米を下させられ候。右の通り商売相止候ては猶更餓死に及び申候……是

迄の通り、成しおかせられ下され候はゞ有り難く存じ奉り候

以上

寛政十年　午六日

四方町組頭　四郎三郎
同　佐五平
同　八十郎
同　太郎右衛門
同　伝右衛門

御郡奉行様

右は組頭共に下方より達て御歎じ申し上げ奥れ候よう相断り申すにつき、打返し詮議をとげ候ところ、かよう御座候ては誠に商人漁士ともそして難儀至極に落入り……御憐愍の上をもって是までの通りに宜しく御賢慮なし下させられ候よう願い上げ奉り候。

以上

四方町年寄　彦八
同　七郎左衛門
同町肝煎　徳右衛門

四方の漁民はこの土地が「富山藩領唯一の漁業地」[6]であり、その漁獲物は八幡、倉垣など、その後背地の農村や更にはより重要な市場を二里ばかり南にある富山の城下町に求めてここへの行商によって生活の糊口をえていた。したがって「御城下売御免」でなくとも、四方から富山への入口で四方から一里半南に位置する百塚口の番所においての通行を認められていたけれども、城下町の魚問屋の統制が前進してくれば、当然に少々の水田耕作と漁業に依存する

にすぎない漁民の生活がおびやかされることになり、四方町組頭とともに町を取締管轄する町年寄が従来通りの緩漫な処置を願い出た。

彼らの要請は遂に「その情状を憫み、禁令は殆んど空文の如く黙許に附したり」とのべられる程にその希望は達成せられ「漁民は従来の如く行商を私にすることを得た」[8]。

このように一応四方の漁民側は従来の慣習を認知せしめることに成功したけれども、十年余り後、湯原某郡奉行となると再び法令が厳守せられ、領主的統制が再強化された。漁民惣代は従前のように再三嘆願したけれども効がなく富山への行商は実際上困難となり、その死活問題が深刻化した。文化三年十二月四方町年寄栂野彦八は奉行にその窮状を訴え一身を犠牲にして屠腹し死をもって解放を願った。藩当局において「其義烈に感じ其死を憐み、湯原の専恣を責めて其の職を褫い禁令を解く」[9]こととなった。漁民には領主的統制に対抗しようとする経済的或いは政治的意図乃至行動はみられず、僅かに町年寄の死の抗議という形をもって現われたものであった。漁民は彦八の行為を称えてその石像を町の東郊富山往来に建てまたその後九十年を経て祠をたて石像を遷し登賀比古社にまつった。

嘉永年間から能登の生魚が運びこまれるようになり、これと共に能登の塩、薪炭も搬入された。こうして魚市場には能登、富山湾の魚類が移入された。

(ハ) 農　家

四方の耕地は大正中頃田が七九町三畝一五歩、畑一町六反五畝十二歩[10]であって、水田が圧倒的に多いのであるが、この水田は加藩三代の主利常の寛永の頃、建設せられた牛ケ首用水[11]の開鑿によるところ大であった。牛ケ首用水は神通川の中流鳴子村より水をひいて、婦負郡、射水郡の水田に灌漑するもので加越能三州の第一の用水路であり、これによって附近一帯の約四万石の生産高について用水が確保された。寛永十年の「当時新古割高」をみると、

一、三百五十五石八斗七升　　窪　村
一、六百十三石　　四　潟
一、四七石九斗　　西岩瀬

で例えば北窪村（江戸時代は窪村といった）は牛ケ首用水の水受高三百五十五石八斗七升[12]であった。

これが「明治二年の十村大場家の旧記によれば、古高三七〇石二斗三合、新高二八石二斗二升五合、計三九八石四斗二升八合とあれば、寛永の頃より明治の初年までに約五〇石程度更に増加せるをみる」[13]とあるように既に寛永の頃にはこの土地の大部分が開拓されていたことを知ることができる。

文化五年の四方町の古地図を現在と比較すれば同地図にある海辺の浜町各丁、四十物町、北町、川端町は現在は海中となっている。又元文四年のそれと照合すると当時なお田地であったところに野割町各町、田町、御坊町、神明町の各町ができた。[14]

享保十九年十月十日に四方村に大火があり、同年十一月四方村肝煎又六、長百姓与三右衛門他四名から古川勘兵衛様栂野覚兵衛様にあてた報告の「御郡方御用留」によれば、

南風烈しく御座候に付両隣へ火移り殊に水遠く御座候故、防きようもなく、百姓不残四二軒、並頭振家二四五軒外に長福寺塔頭一軒家数〆二九七軒焼失した。[15]

これは、頭ふり家数二八五軒のうち三一軒と新村（延宝年頃、寒江村草高一五〇石の畔田九右衛門が開拓[16]したもの）百姓頭ふり一六軒その他長福寺、唯見寺塔頭共に三軒合せて五〇軒を残すのみであり、また土蔵一五、網道具の納屋敷一七のうち土蔵二つ、納屋一三焼失するという大火災であった。がこの書より当時の四方村は百姓四二軒、頭ふり二八五軒新村百姓頭ふり一六軒、あわせて三四三軒の村であったことが知られる。（未完）

註
(1) 四方町沿革誌　一九九頁
(2) 〃　七〇頁
(3) 婦負郡志及び四方町沿革誌六二頁　なお四方の河西家文書によれば天保元年四方町魚問屋の覚書として今市屋助四郎、大泊屋勘兵衛、浦屋徳右衛門があり「問屋前において魚の高下の差別相立て、其の年の益より御冥加のため年々銀子三十枚上納仕り候」とある。
(4) 四方町沿革誌　六三頁
(5) 越中婦負郡志及び四方町沿革誌　六二頁
(6) 四方町沿革誌　六二頁
(7) 〃　六五頁
(8) 〃　〃
(9) 〃　六六頁
(10) 〃　八頁
(11) 牛ケ首用水史、越中婦負郡志　七一頁
(12) 四方町沿革誌　三六頁
(13) 〃　三七頁
(14) 〃　七八頁
(15) 〃　四九～五一頁
(16) 〃　四二頁